

並木正吉さんと 総研

元・農業総合研究所所員
相川 良彦

2008年7月27日、元農業総合研究所長の並木正吉さんが亡くなられた。享年90歳であった。1960～70年代、並木正吉さんは、基本法農政の理論的支柱となった『農村は変わる』(岩波新書)の著者として、有名な農政エコノミストだった。

1971年春に入所した私は、ちょうど並木さんが部長となった計画部に配属された。室長は清水良平さんだった。当時も研究部は3部構成で、計画部は行政ニーズに応じた実用的な近代経済学専攻が多くて主流派、調査部は農政に批判的なマルクス経済学専攻が多くて反主流派

で、両部門には対抗的な雰囲気があった。海外部は国別に気ままだに研究していた。

並木さんは紳士的だが、背後には強固な意思を感じさせたし、周囲からも一目置かれていた。当時、若手研究員の兄貴格で情報通だった宇佐美さんの講釈によれば、並木さんは東畑初代所長が将来性を見込んで引き抜いた子飼いのエリート集団の一人で、東大法卒、総研に来る前に外務省の調査部門におられた、ということだった。

並木さんは、高校以来の旧友・中山誠記さんの早逝(1967年)を悔しがっておられたが、1970年代前半頃は清水さんと毎日昼食を伴にする以外、他の研究員と茶や酒を共にするといった集団行動を取られなかった。あくまで機能的で講演と研究と管理職務に専念して、宴会・部会の雑談でも農政問題や趣味のマラソンなどサバサバした話題が多かった。他方で、並木さんは講演の名手で、テレビや講演・研修会などで幾度となく聞く機会があった。1970年代は、農業基本法の近代化路線が破綻し、並木さんの農業改革論も批判に晒された時期だったが、明快なロジック、「お天気と農業は西から変わる」等のキャッチフレーズそして、具体例と数値を挙げる語り口等により、格段に説得力があった。

ある時、労働組合の新聞コラムに、並木は守銭奴だ、という中傷記事が載ったことがあった。講演を依頼したら、講演料を請求されたのだという。この記事には、並木さんも頭に來たらしく、私を昼飯に誘って、どうも日本人は未だに水と情報はタダだと思っている、と憤慨された。生粋の近代合理主義者だった並木さんは、研究を情報産業と位置付けて、国立研究機関においても、市場原理を率先して導入しようとしていた。守銭奴に関しては気前の良い人だった。

政治話が大好きだった清水さんによれば、渡邊所長を徳川とすると、並木さんは勝海舟、調査部の斎藤さんが長州・木戸孝允、そして、自分は両者を取り結ぶ坂本龍馬だという。残りは元気が良いと薩摩、チグハグだと土佐に分類された。当時の研究部対抗は、この程度の、党派性のない、陽気で、剛毅な話だった。並木さんは、労働力を中心に研究をされ、『農村は変わる』(1960)が代表作であった。それは、戦前から長らく不変と言われてきた日本農業がこれから急激に変化するメカニズムを後継補充率に見出して大胆に予想したもので、農業近代化政策の理論的支柱となった。だが、平地農村では、農業構造の改善は並木さ

んの期待したペースでは進まず、予想通りに進み始めたのは、漸く1980年代以降の中山間地においてであった。1980年代、農政研究センターで久し振りに会った際、並木さんは、楽しみに言われた、自分の説は、唱えるのが20年早かった。これから、言った通りになりますよ、と。

並木さんの研究は、現実から予兆を見つけ、論理的に説明づけ、将来の方向を見定める、未来志向型であった。国民経済の中に農業を位置づけ、農産物輸入を避けたいと捉え、農地余り現象や高齢化を予見して、その指針を農政へ示した。と同時に、自分の研究と異なる研究(例えば、歴史にも理解を示し、尊重するキャパシティを持っておられた。

1970年代の総研は、研究を個人嗜好にゆだねる自由主義と、需要と競争にゆだねる市場主義と、組織統制にゆだねる管理主義とが交錯した時代であった。並木さん個人は市場主義を単騎で先駆けする謙信型だが、所長になってからは異なる3つの主義を調整・統合する信玄型に変身された。当時は戦後農業経済学の決算期で、総研でも百花斉放の研究成果が結実しつつあった。並木所長は、個々の研究員をまずは自由に泳がせて、その成果を政策へすくい上げる名鶴飼いであった。